

安部公房 『他人の顔』論

——自己疎外と加工された顔——

片野 智子

〔キーワード…①安部公房 ②『他人の顔』 ③素顔と仮面 ④自己疎外 ⑤美容整形〕

1、問題提起

『他人の顔』は一九六四年一月『群像』にて発表され、同年九月に講談社から単行本として刊行された安部公房の作品である。科学実験中の事故で顔面にケロイド癩痕を負った「ぼく」＝主人公は、他人の顔型を借りて制作した人間の素顔そっくりの仮面を製作し、その仮面を被って赤の他人になります。妻を誘惑しようとする。ところが、あっさりとは仮面の誘いに乗った妻に対して「ぼく」は不信感を抱く。やがて、素顔の「ぼく」と仮面と妻という三角関係に耐えられなくなった「ぼく」は、一連の計画を詳細に記録した三冊のノートを妻に読ませることで、この仮面劇に終止符を打とうとする。だが、妻は初めから仮面の正体が「ぼく」だ

と知っていたという内容の手紙を残して、「ぼく」の元から去ってしまう。打ちのめされた「ぼく」が再び仮面を装着し、空気拳銃を手にして路地裏に身を潜めるところで物語は幕を閉じる。本文は「ぼく」が妻に宛てて書いた冒頭の手紙と三冊のノート《黒いノート》《白いノート》《灰色のノート》、ならびに《灰色のノート》の中に含まれる《妻の手紙》と、その手紙を読んで「ぼく」が記した《灰色のノート》を逆さに使って、その余白に、最後のページから書き加えられた、自分だけのための記録》によって構成されている。

同時代の『他人の顔』研究では、「ぼく」が経験する「顔の喪失」という問題は、何らかのアレゴリーとして読まれることがほとんどであった。例えばそれは「現代人の連帯感の喪失とコミュニケーションの断絶」⁽¹⁾や「個性や具体的『情緒的な人間関係』」⁽²⁾の喪失、あるいは「現代人の自己喪失」⁽³⁾の暗喩であるとされてきた。そして、素顔の代替となる仮面については、「人々の顔は、実は本当の意味の顔ではなく、抽象的な人間関係のなかで、個人の果たすべき役割を示すための社会的な記号」でしかなく「だからこそ、精巧なプラスチックの仮面は、十分に素顔の代用品と成り得る」とする論⁽⁴⁾や、「自己の本当の孤独と孤立を押しかくして、他者とのコミュニケーションを得ようとする努力のメタファー」とする考察⁽⁵⁾がある。いずれの研究の根底にも、本物の《素顔》（『人間の本质』と偽りの《仮面》（『社会的役割』という二つの概念を対置させる意識が見られる。「われわれはみな本物の自分の顔を失ってしまっている、そしてわれわれはみな仮面をかぶり、コミュニケーションと称して他者とのいつわりの関係を結んでいるにすぎない」という見解はその典型であり、これまでの研究を要約するものと言えるだろう⁽⁶⁾。

そうした先行研究の背景には、「顔の喪失」という「ぼく」の個人的な体験を戦後の資本主義社会の人々が抱える問題と照らし合わせ、そこに「自己疎外」を読みとろうとする意識が共通して見受けられる。『他人の

『顔』の発表された六〇年代は、急速な高度経済成長によって人々の生活が根本から変化した時代であった。そのような急激な生活の変化は、戦後からの解放感や理想（その多くは更なる経済的豊かさを希求するものだったが）を追い求める情熱を生み出したが、一方では拡大する自然破壊や公害問題による日本社会への不安や閉塞感を生み出した。そこから、人間存在は社会を動かす歯車の一つとしてみなされ、自己の本質を失って非人間的な状態に置かれているという「自己疎外」論が一世を風靡する。このような疎外論の根底にあるのは初期のマルクス哲学であり、マルクスは『経済学・哲学草稿』（一八四四年）で人間の本質は労働にあるとしたが、資本主義社会では労働が自己の能力を発揮し実現するためのものではなく、他者に強制される苦役となっているため、人間は類的本質から疎外されていると論じた⁽⁷⁾。

日本での疎外論の流行の端緒を開いたのは一九六〇年に訳出された『近代人の疎外』であり、著者のパッペンハイムは初期マルクスの疎外論とテンニースのゲゼルシャフト（共同体）とゲマインシャフト（利益社会）の概念を基礎に置き、近代社会における疎外状況を労働、政治、社会構造といった多面的な方向から詳しく分析した⁽⁸⁾。平易な言葉で疎外論を説明した本著は、一九七二年まで毎年重版されるほど広く読まれた⁽⁹⁾。一九六三年には『現代社会学講座Ⅵ 疎外の社会学』⁽¹⁰⁾が、一九六四年には城塚登と田中吉六による初の翻訳版『経済学・哲学草稿』⁽¹¹⁾が出版された。こうした疎外論の流行は、近代資本主義社会への批判と共に、かつての農村共同体や土着文化への再評価をもたらすことになる⁽¹²⁾。浅田彰によれば、六八年から七二年にかけて展開する全共闘運動も、近代の疎外を超えて深層の共同性を獲得する試みとして、反近代主義的な側面を持っていたと言⁽¹³⁾。

ところが、『砂の女』（一九六二年）が出版される前年に共産党から除名されたことをきっかけに、安部は政

治的ラジカリズムから急速に距離を置きはじめていた。安部の方向性の転換は、同時代評のほとんどが『砂の女』をある種の〈転向〉作品として読み取り、「無国籍者」⁽¹⁴⁾ ないしは国家をはじめとするあらゆる共同体からの「逃亡者」⁽¹⁵⁾ というイメージを安部に付随させていく動きと連動している。更に、六〇年代以降の安部は「他人」(ないし「他者」と「隣人」という用語を用いて、前近代的な共同体へ回帰しようとする潮流を繰り返し批判していた⁽¹⁶⁾。これらの要素は、『他人の顔』は従来の疎外論の枠内にとどまらないことを示唆していると言えるだろう。

ところで、近年の『他人の顔』研究では、仮面そのものよりも作品の構造や着想した背景について論ずるなど、扱うテーマは細分化の道を辿っている。波瀾剛は作品の構造について、「ぼく」の新たな自己を構築するための場であるノートが、妻の手紙によってその自己完結性を問われ、やがて「ぼく」の自己そのものが解体されていく構図になっていることを指摘した⁽¹⁷⁾。他にも、『他人の顔』は顔面の欠損と仮面による再生の試みを描いているが、その物語は都市化による共同体の崩壊と再創造にも対応するものであり、そこで用いられているのは皮膚に焦点化された身体の言語であるとした論や⁽¹⁸⁾、『他人の顔』に描きこまれた〈異形の身体性〉に着目し、同時代に発表された川端康成の「片腕」、澁澤龍彦の「人形塚」との関連性を考察したもの⁽¹⁹⁾がある。

勿論、仮面の意味や役割について論じたものもあるが、ここでは相変わらず疎外論的な読み方がなされているのが現状である。例えば、中野和典は仮面に振り回される「ぼく」の姿は先行する役割(仮面)に内面(素顔)が従ってしまうという現代人の在りようの戯画化であることを指摘している⁽²⁰⁾。他にも、「ぼく」の仮面は「他者とのコミュニケーションの回復の努力を表徴する一方、真の自己を隠そうとする努力も表徴する」

という考察⁽²¹⁾や、仮面を被るという行為は疎外された孤独な人間が他者に近づこうとしてみる「思いやり」の表れであるとするもの⁽²²⁾がある。これらの論は、素颜ないし仮面を何らかの比喩として扱っている点において共通している。一方で、武石保志は顔とは常に他者から見た仮面（＝役割）であって、仮面を離れた純粋な素颜などというものは存在しないと、素颜と仮面の二項対立の論理を批判している⁽²³⁾。だが、武石の論もまた、仮面を単なる社会的役割の比喩としてしか見なしていない点に問題があるだろう。こうした論に対して、田中裕之は仮面制作の具体的なプロセスや、仮面が社会に普及した時の「ぼく」の想定は「喩や寓意の範囲に収まりきるものではない」と述べた上で、「ぼく」の仮面は誰でもないと同時に誰にでもなれる極限的な自由の可能性を持っていると主張している⁽²⁴⁾。

だが、仮面を被ること誰にでもない者になれるのは何故だろうか。ここで浮かび上がってくるのは、顔とは社会においてどのような役割を果たすものなのか、そして、それは自己という存在においていかなる意味を持つものなのかという問いである。そこで本論では、「顔の喪失」＝資本主義社会に生きる人々が抱える自己疎外の問題という、これまで自明のように扱われてきた図式をいったん保留にして、『他人の顔』において、比喩としてではない顔がどのような現象として扱われているのかについて注目したい。具体的には、顔の持つ性質を三つに分けて分析することで、「ぼく」の仮面が〈素颜〉／〈仮面〉＝真／偽という二項対立の論理を解体するものであることを明らかにしたい。その上で、従来の疎外論の枠組みに当てはまらないような、顔の持つ根本的な自己疎外性をキーワードに、新しい読みの可能性を提示できればと考えている。

2、自己疎外性・内面性・共同性

本章では、『他人の顔』において描かれる顔の性質を①自己疎外性②内面性③共同性という三つの観点から分析してみる。これらの性質は独立したものではなく、相互に影響しあうことで有機的に結びついている。(顔)の性質を具体的に分析することで、〈素顔〉という観念の恣意性も明らかになる筈だ。

まず、第一の自己疎外性から考えてみたい。顔に損傷を負った直後の「ぼく」は、「たかだか、人間の容器、それもほんの一部分にすぎない顔の皮膚」を失ったくらいでは「れっきとした研究所の一部門をあずけられ、船の碇くらいの重さでは、しっかり世間に結び付けられているぼく」の自我は揺るがない筈だと考えていた。だが、仕事場の同僚によそよそしい態度をとられ、更には妻に性交を拒絶されたことを契機に、「ぼく」は顔に「ぼっかりと深い洞穴が口をあけた」ような幻覚に苦しめられる。「ぼく」が仮面作りを決めたのも、それが「顔の穴をふさぐ栓」になるのではないかと考えたためであった。

そこで「ぼく」は人工器官の開発に取り組んでいる高分子科学研究所を訪れ、K氏という医師と論議を交わす。K氏は「顔というのは、つまり、表情のことなんですよ」と述べた上で、顔は「自分と他人とを結ぶ通路」であると言う。更に、K氏は幼児心理学の例を挙げ、人間とは「他人の目を借りる」ことでしか自己を確認できないと述べる⁽²⁵⁾。それは、鷺田清一の言うように、「わたしは自分の顔に、(自分でも気づかない)その微妙な変化に、他人の顔をまなざすことによって、間接にしか近づくことができる」ことを意味しているだろう⁽²⁶⁾。つまり、他者の表情を鏡とすることで、現在の自己の表情を想像するということである。だが、そこには圧倒的な非対称性があることに注意すべきだ。実際の鏡を目の前にすれば分かるように、鏡の中の自己の

顔とは、左右が反転し、ガラスの表面に映し出されるせいで、極端に平面化されたものである。ところが、それが正確な自己の顔の反映でなくとも、私達にはそれを受け入れる他に自己の顔を知る術がない。鷺田はそのような顔の不可視性について「わたし」の所有権がはじめから剥奪されているという意味で、顔は文字通り「わたし」の外部である」と述べている。そこには資本主義社会から疎外される「自己」よりも、もつと根源的かつ決定的な「自己」の疎外のありようが示されていると言えるだろう。自己が自己自身であるところの顔に、刻一刻と変わりゆくその変化も含めて、他者という鏡を経由してしか近付けないということ。同時に、その鏡に映された自己が本物とは異なるものであったとしても、それを受け入れる他に自己を確認できる術がないということ。これが顔の持つ第一の性質、自己疎外性である。

だとすれば、顔に損傷を負ったことで「ぼく」の自己同一性に揺らぎが生じたのではなく、他者の反応（表情の変化）から「ぼく」自身の顔を想像する可能性が失われたことで、顔が本来持っていた自己疎外性がむき出しになったというべきではないだろうか。「他人の顔」の「ぼく」の顔に開いた「洞穴」は、自己という存在が穴や隙間だらけのイメージとしてしか存在できないことを示している。例えば、同僚の女性に《偽りの顔》というデッサンを見せられた時、「ぼく」は思わずその画集を縦に裂いてしまうが、それは「見られるばかりで見返すことのできない、偽りの顔」が「まるで彼女の眼にうつった、ぼく自身のようにさえ見えて」しまったからである。素顔を包帯で覆い隠す「ぼく」は、奇異の目を一方的に向けられることはあっても、見返すこと、つまり他者の顔を鏡とすることで、今の自分の顔がどういう状態にあるかを想像することができない。電車の中で出会った親子連れのように、「ぼく」が見つめ返そうとすると、誰もが表情を凝固させるか、目を背けてしまうからである²⁷。そのようにしてむき出しになった顔の自己疎外性を覆い隠すために、「ぼく」は「顔

の穴をふさぐ栓」としての仮面を求めたのだった。

次に、第二の内面性だが、これは〈素顔〉という観念と関係している。「ぼく」は肖像が普遍的な表現として成り立つためには、「顔とその心が一定の相関性」を持つことが条件だと述べている。肖像画や肖像写真という概念が成立するためには、顔面の向うに一つの「人格」ないしは「個人」を見出そうとする眼差しなくしてはありえない。ここで注意すべきは、そのような顔（＝外面）と心（＝内面）の結びつきがごく近代的な発想によるものだということである。川添裕子によれば、前近代的な共同体では、身体加工を伴う儀礼を正しく行うことで、共同体のメンバーと当事者は子供から大人、あるいは未婚者から既婚者へと、別の段階へ移る身体を相互に確認しあう。ここでは外面と内面はそもそも区別されておらず、身体は「What I am」（わたし）がそうであるところのもの）として考えられている。ところが、近代哲学の祖であるデカルトは、人間を物質的な身体とそこに宿る精神から成るものとして区別する心身二元論を提唱した。そして、思惟する精神こそが人間存在の本質であり、身体はそれに対して二次的なものと考えた。ここから身体は、「What I have」（わたし）によって所有されるもの）に変化する。デカルト以降、意識／対象、精神／身体、内面／外面といった二分法によって世界は捉えられ、前者は後者よりも優れたものとみなす考えが定説となる⁽²⁸⁾。

そうした二分法を前提にした上で、『他人の顔』では内面性と外面性が一致するような状態にある顔が〈素顔〉としてとらえられている。鷺田の言葉を再び借りれば、「その背後に、一つの人称的な存在、「だれか」（＝人格）としての自己同一性と連続性）をもち、顔の外面性に対しては内面性としてとらえられるべき存在が透かしか見られており、そういうものとの関係のなかで顔がとらえられている」状態である⁽²⁹⁾。これが顔の持つ第二の性質、内面性といえる。つまり、外面と内面とを二分化した上で、両者に相関性を見出そうとする眼差しが、〈素

顔」という観念を可能にさせたのである。それが誰にとっても自明なものになる時、「ありのままの」顔としての〈素颜〉に対して、「いつわりの」顔としての〈仮面〉が対置される。その中で、〈仮面〉が社会的な役割を、〈素颜〉が固有のアイデンティティーを意味するようになったのは、古い共同体の崩壊と近代資本主義の発達によって、人々が自己をそのような二重性の中で意識しなければいけなくなったためであろう³⁰。むしろ、そうした〈素颜〉と〈仮面〉を対立させる図式の根底には、外面より内面を優先させる近代的な人間観がある。それは、先に引用した『他人の顔』の先行研究のように、内面をより正直に映し出す〈素颜〉こそが〈仮面〉より優れたものであるという考え方に通じているのである。

先にも述べた通り、私達は他者の顔を鏡とすることでしか自己の顔に近づくことができない。そのような顔の自己疎外性を覆い隠すために顔と内面性との連続性が求められるのだ。つまり、顔の向こう側に一貫性を持つ「私」という内面を読み取ろうとする態度が常態化することで、主体としての自己がまず初めにあって、その自己をありのままに映し出す〈素颜〉を介して他者とコミュニケーションすることが人間の正しいありようだという転倒が起きる。六〇年代に流行していた自己疎外の問題は、そのような主体としての自己が、政治や労働といった資本主義社会の抱える様々な問題によって阻まれることで生じるものであった。だが、疎外論の過熱は一方で、確固たる主体としての自己というものが本当に存在するのかという問いを置き忘れてしまったように思われる。後述するように、『他人の顔』は近代的な〈素颜〉の偏重や内面主義と連動した疎外論に通じる回路がある程度は持ち合わせているものの、より根本的な疎外の問題——人間は他者という鏡を通してしか自己の姿を確認することができないこと——を私達に突きつけている。

現に『他人の顔』の「ぼく」は、顔に損傷を負ったことで、顔が本来抱えていた自己疎外性に直面する。更に、

その経験は顔の内面性への懷疑を引き起こすのだ。そこで「ぼく」はアンリ・ブランの「顔」という本に記載された顔の分類法に着目する。この分類法は、中心突起型か中心陥没型か、骨質か脂肪質かという項目に沿って、顔を四つの基本形に区別するというものである。「ぼく」は「中心突起型、骨質——鼻を中心に、鋭く上がった顔」を再現することを選び、本物の顔と見分けがつかないほどリアルな仮面作りに着手していく。ここで「ぼく」が参照するブランの分類法は、顔面を各「個人」と結びつける〈素顔〉という觀念から離れ、骨格や筋肉といった物質的な諸要素によって顔をパーツごとに分け、それらをパターン化するものである。ここでは顔は徹底的に物として扱われ、メスを入れられ、様々な角度から撮られ、平均化されている。そのような仮面作りを通して「ぼく」が確認するのは、顔とは内面を表現するものである、あるいは内面との相関性においてこそ顔は価値を発揮するという考え方が恣意的なものにすぎず、顔は内面とは無関係に存在しているのだということである。

最後に、第三の共同性についてだが、これは先に述べた通り、自己への直接的な通路を欠く者同士が互いの鏡になる関係のことである。鏡としての他者の顔から自己の顔を想像し、その想像された顔から他者もまた他者自身の顔を想像する。そのようにして自他は己の存在を措定する他ないのだから、自己と他者とは同一の想像のコードをなぞることでしょうか、自分という存在にたどり着くことはできない。想像のコードとは、顔を常に「個人」の顔として見る、言い換えれば「個人」の内面を外部へ表現したものとしてみる、そういった近代的な顔の解釈のコードのことである。そのような解釈のコードがあるので、実際は他者の顔から想像された自己の顔であったとしても、あたかも自他は独立した存在として、揺るぎのない固有の「個人」の顔を持つかのようにみなされるのである⁽³¹⁾。かくして顔の共同性と内面性とが結びつくことで、自分の顔が自分では見えない

という、ごく単純だが決定的な疎外の問題は覆い隠される。

仮面作りにより出した当初、「ぼく」は単純に「顔の穴をふさぐ栓」＝失った顔の代わりとなる仮面を求めていた。しかし、「深い洞穴」と化した顔＝自己疎外性をむき出しにした顔は、「それにしても、あの顔を持っている連中の、あの屈託のなさはどういふことなのだろう？」というように、顔の内面性や共同性（を当然のように受け取っている人々）に対する懐疑を「ぼく」の中に生み出す。その懐疑はやがて、顔の内面性や共同性を打ち壊し、これまで他者の手に委ねられてきた自己の顔の所有権を取り戻すためにはどうするべきかという問題意識を引き起こすことになる。そこから「ぼく」は「人間の存在を賭けた、脱獄の試み」としての仮面作りへと意識を修正していくことになるのだ。それはつまり、自己疎外性・内面性・共同性、このいずれにもあてはまらぬ顔を自らの手で作り出すことを意味していた。

3、「ぼく」の仮面の果たす役割

まず、覆面で顔を隠すことについて、「ぼく」は「表情を隠すことで、顔と心との関連を断ち切り、自分を世間的な心から解放する」効果を見出している。覆われた顔の醸し出す不気味さは、「誰か」を意味する顔が消去される＝自己が匿名化されることにある。外面と内面の連関を覆面によって断ち切ることは、〈想像する＝想像される〉顔の共同関係を他者と結ぶことの一方的な拒絶となろう。それによって自己の存在を取り巻く様々な規範やしがらみが効力を失い、普段の自分ならばできないことができるようになるのだ。「ぼく」はどのような覆面の機能について、「仮面を、通路の拡大だとすれば、覆面は通路の遮断であり、むしろ対立的な

関係にあるはずのものなのだ」として、仮面との差異を強調している。

ここで着目すべきは、本物の顔と区別がつかないほど精巧な「ぼく」の仮面は、赤の他人になりすますことで、完璧なアリアバイを「ぼく」に約束してくれるということである。「ぼく」はその仮面を「コンクリート製の鎧」と表現し、その仮面を被って街を歩き回った時の解放感を次のように表現している。

ぼくは、名前も、身分も、年齢もない、仮面の陰に身をひそめ、自分だけに保障された自由の安全性に、勝誇つたような気分になっていた。連中の自由が、磨りガラスの自由なら、ぼくのは完璧な透明ガラスの自由だ。

「ぼく」の仮面は自己の存在を匿名化する点では覆面と同じ効果を果たすが、そこに「ぼく」とは似ても似つかない別人の顔を上書きすることで、その匿名化した痕跡まで消してしまう。つまり、「ぼく」の仮面が彼自身のものとはまるで異なる素顔を装っているために、それが仮面であることがばれない限りは、「ぼく」は無制限に行動できるということだ。例えどんな罪を犯したとしても、仮面を外してしまえば、「ぼく」が罪に問われることはない。それこそ「完璧な透明ガラスの自由」である。このように、「ぼく」の仮面は外面と内面の連関を断ち切り、ひそかに〈想像する―想像される〉顔の共同関係の外に出ること、**「禁止の柵」**を乗り越える力を持つている。

更に、「ぼく」が仮面を作る際に表情筋の再現に非常な注意を払っていたことにも注目すべきであろう。「ぼく」は「笑い」「拒否」「不満」「嫌悪」といった十二の項目を挙げ、それらの表情を一つ一つ仮面の皺になじませることで、本物の素顔と見分けのつかない「動く仮面」を再現する。そこには〈想像する―想像される〉

顔の共同関係が自他の表情の読み合いによって築かれることが関係している。豊かな表情を持つ「ぼく」の仮面は、そのような顔を媒介とする人々の連帯に溶け込むことを可能とする。ところが実際には、素顔の「ぼく」は「仮面の陰に身を潜め」他者を一方的に覗くことができる。自分は相手の素顔を見ることができなければならないけれども、相手は自分の素顔を知らない、という訳だ。それは窃視の快楽と似ている。ただし、覗き見という行為は（見る―見られる）⇨（想像する―想像される）顔の共同関係の外部において、つまり相手に気付かれていないことを前提にしなければ成立しない。それに対して「ぼく」の仮面は、表向きは他者と堂々と対面したまま、実際は損傷した素顔を晒すことなく「仮面の陰」から相手を覗き見ることができる。人前に身を曝した状態で好き勝手に覗き見ることのできる自由は、いつしか、何でもできるもう一人の自分になれたような全能性を「ぼく」にもたらしていくのだ。

以上のように、「他人の顔」を模した「ぼく」の仮面は、（素顔）という観念と他者との鏡像⇨想像関係によって顔の自己疎外性を覆い隠すことで結ばれる人々の連帯の内側に在りながら、その裏では「禁止の柵」を気にせず行動する自由と覗き見の快楽を「ぼく」に与えてくれるという点で、秩序の内側に在りながら秩序を揺るがす力を持っている。仮面のもたらすその効果を利用することで、「ぼく」は顔の損傷によって「覆面の異形」という怪物的存在へと貶められた自己の存在を、積極的な「誘惑者」へと変えようとする。それは、具体的には赤の他人として妻を誘惑し、その不貞を「仮面の陰」から「ぼく」自身が覗き見するという行為によって果たされる。

同時に、「ぼく」の仮面は全くの別人になりすますことで、（素顔）という観念⇨外面と内面との一致を当たりの前のように受け取ってきた妻を始めとする他者に対して「見えているのは、仮面だけで、真実は直接目に見

えない」こと、つまり〈素顔〉とは背後に読まれるべき「内面」を隠しているという点で〈仮面〉と同じにすぎないことを突きつけるものである。そのようにして「ぼく」は「生れついた自分の顔の外に出る」¹¹ 〈素顔〉という観念と〈想像する―想像される〉顔の共同関係によって形成されてきた自己の顔の外に出ることを目指したが、それは、これまで他者の表情を手掛かりにして想像するしかなかった自己の顔のイメージを放棄し、他者の眼差しを頼りにすることなく、皮膚から顔の造作、そして表情に至るまで、すべてを自分の手で作り上げるという点で、顔の自己疎外性を乗り越えようとするものでもあった。

4、美容整形と危険な仮面

もつとも、顔をとり変えることで新しい自分になるという考えは、現代においてもはや夢物語ではない。その一つに「美容整形」の技術がある。もちろん、美容整形は別人になるためではなく、自己を補整しより美しく見せるための技術として利用されているし、「ぼく」の仮面は美容整形のように顔面ごと作りかえてしまうものでもない。だがそれでも、「生れついた自分の顔の外に出る」ことを目的としている点では両者は軌を一にする。谷本菜穂は『美容整形と化粧学』で、二〇〇三年～二〇〇五年にかけて一三六五名を対象に行った美容整形に関するアンケート調査を実施し、美容整形を行う女性にとって重要なのは、現実の他者の反応や鏡に映った自己の姿ではなく、自分が想像した他者の評価と理想化された自己の姿であると推察している。それは究極的にはナルシシズムに近いが、谷村はそこに「自らの意志で自己を変えていく強い能動性」を見出し、一定の評価を与えている¹²。私達は自分の顔を自分で見ることができない。それにも関わらず「生れついた自

分の顔」は決して切り離すことのできないものとして、現実の他者の視線に常に晒されている。他者の視線や表情、あるいは仕草を手掛かりにしてイメージすることしかできない、そのような曖昧で受動的な自己の顔のあり方をなんとかして変えたいという欲望が、美容整形という技術によって可能になるのである。

日本で美容整形が最初に行われたのは一八九六年の美甘光太郎による重瞼術がその始まりとされているが、戦時中は形成外科による顔面の再建が優先され、美容整形という名で一般に浸透してくるのは戦後、それも一九五〇年代を境にすることである。メディアからは「君知るや プラスチック外科」(『オール読物』一九五〇年十一月号)、「特集科学界トピックス 1 整形外科の美顔術」(『週刊朝日』一九五一年十一月二十五日)といったかたちで注目を浴びるようになり、日本美容外科学会理事の塩谷信行は、この頃全国で美容整形を名乗るクリニックはおそらく百を超えていたのではないかと回想している⁽³³⁾。このような美容整形の一大ブームは、高度経済成長により人々の生活が格段に裕福になったことで、「より美しくなりたい」という豊かな生への欲望が肯定されるようになったことが背景にある。

そのような美容整形の流行に対して、田中澄江は「整形美容は人間の敗北 心からにじむ表情の美しさ」(『週刊読売』一九五六年九月十六日)で、真の美しさは内面から滲むものとして批判している。三島由紀夫も「(美容整形)この神をも恐れぬもの」(『サンデー毎日』一九六五年三月二十一日)で、「精神のことなんか置きざりにして、外面だけ美しくしようという考えは、人類の抱く一等浅はかな考え」だと述べている。彼らの考え方の根底には、外面より内面を優先させながらも、両者に相関関係を見出す(素顔)という観念がある。近代に入ると自己と顔との関係が「What I am」から「What I have」の関係になることは既に述べたが、これは国民国家の成り立ちとも無縁ではない。顔や身体にどれだけ加工が施されたとしても、それらが帰属する先の

アイデンティティーさえ変わらなければ、国家は依然として各個人を管理できる。だが、〈わたし〉という存在のありかが目に見えるものでない以上、個人のアイデンティティーを保証してくれるのは〈素顔〉という觀念に他ならない。つまり、免許証や保険証に登録するための〈素顔〉があり、その〈素顔〉が個人にとって唯一性と連続性を持っているという言説の上に近代国家は成り立っているのであって、国民もまたその制度に依存せざるを得ないということだ。田中や三島美容整形批判は、このような制度の枠内においてこそ効力を発揮するものであり、その点で権力に従属する言説だと言える。

しかし、顔の向こう側に内面を読み取る考え方を否定する『他人の顔』の「ぼく」はそうではない。「ぼく」は「自分用のと同じくらい精巧な仮面」が世間に普及した場合を想定して、次のように述べている。

身分証明書は役に立たなくなり、手配のモニタージュ写真も無効になり、見合い写真も破って捨てられる。見知っている者と、見知らぬ者とがごっちゃになり、アリの観念そのものが崩壊してしまうのである。

誰もが「誰でもない者」になれる可能性を持つ世界、それが「ぼく」の仮面が普及した世界である。素顔と見分けがつかない上に何度でも取り換え可能な仮面は、美容整形を繰り返す顔と重なるところがある。現実には美容整形を繰り返すことは、皮膚の硬化や合併症の発症などの様々なリスクを伴う。が、「プチ整形」という言葉の流行が物語っているように、技術が発達するにつれ、美容整形を気軽に行う人やリピーターが増えてきているのも事実である。そのようにして美容整形への抵抗感が減り、誰もがファッション感覚で顔を取り換えるようになった時——「ぼく」の言葉を借りれば「たえず新しい仮面を追い求める習慣が日常化」した時——

そこでは確かに国家が各個人を管理するための〈素顔〉という制度は無効化し、「アリの観念そのものが崩壊」する可能性が生じる。

一九七八年にリチャード・ニーリーによって書かれた『仮面の情事』(原題『The Plastic Nightmare』)は、事故によって記憶を失った主人公が、外科手術によって顔を別人にすり替えられてしまうというサスペンス小説である⁽³⁴⁾。その顔の元々の所有者である男の妻は、殺した夫の顔を主人公に移植することで、完璧なアリのパイを手に入れる。偽の妻の仕掛けた策略によって、主人公は記憶までも人為的にすり替えられてしまう。彼女に対して疑惑を募らせていく主人公の語りを通して、顔の喪失が自己の喪失へとそのまま結びつく恐怖を描いている点では『他人の顔』と共通しているが、『仮面の情事』は主人公が記憶を取り戻すところで終わっている。小野俊太郎は「ニーリーはミステリーの定道である読者をあざむくための「偽の解決」偽の物語」を「仮面」他人の顔」へと背負わせることで、失われてしまった本物の顔とつながる物語こそが本物の解決であると示した」と述べている⁽³⁵⁾。その点において、『仮面の情事』は〈素顔〉の喪失によるアイデンティティーの揺らぎを描いているものの、〈素顔〉／〈仮面〉＝真／偽という二項対立の図式を崩すまでには至っていない。それどころか、ラストで失われた顔に基づく記憶を主人公に取り戻させることで、〈素顔〉という観念を強化する役割さえ果たしている。

これに対し『他人の顔』の結末では、妻に正体を見破られた「ぼく」は、空気拳銃を手无路地裏へと身を潜める。『仮面の情事』の主人公が自己の顔と「仮面」他人の顔」を無理やり取り替えられた被害者であるのに対し、「ぼく」は「こうする以外に、素顔に打ち克つ道はないのだから、仕方がない」として、「仮面」他人の顔」を利用して通り魔となることを選ぶ。「だが、この先は、もう決して書かれたりするのではないだろう。書く

という行為は、たぶん、何事も起らなかった場合だけに必要なことなのである」という『他人の顔』の結末は、物語ることそれ自体を放棄することで、自己の喪失という問題に対し安易な解決を与えることを一切拒否している。

ふつう、美容整形が肯定されるのは、それが他者に不快感を与えかねない自分の顔を訂正することで、積極的に社会に参画していく意志の表れとしてみなされるためである。その点で美容整形は犯罪者が逃亡やアリバイ作りのために別人の顔に加工することとは一線を画す行為と考えられている。だが、両者に差異は本当にあるのか。あるとすればそれは何によってつくり出されたものなのか。「ぼく」の仮面はどのような「禁止の柵」の恣意性を暴き出し、〈素顔〉／〈仮面〉＝真／偽という概念的分割を不確かなものとする。そのような事態に対して、国家は仮面に法的な規制を与えることで対処しようとするが、それでも仮面を利用した犯罪は後を絶たず、いずれ国家の存続自体が危ぶまれることになる。「ぼく」は言う。

六〇年代の疎外論の流行が、全共闘運動のように近代化によって失われた深層の共同性の回復を試みる動きと絡んでいたことは既に述べたが、こうした現象と並行して、人々の間では無自覚的なナショナリズムが広がっていた。地域コミュニティが崩壊し、全国の生活様式や文化が高度経済成長によって「画一化」するに従って、人々がかつての共同体における「村人」に代わって「日本人」という連帯を結んでいったのである⁽³⁶⁾。知識人の中でも、古代以来の既成事実を指す言葉として「単一民族（国家）」という言葉が用いられるようになる。例えば一九六一年には経済学者の小泉信三が「ロシアやシナ」と対比し「日本国民と言うものが幸いにもこれとは違ってかく単一同質」であると強調し⁽³⁷⁾、三島由紀夫は一九八九年の「文化防衛論」で、「日本は世界にも稀なる単一民族単一言語の国」であるとした⁽³⁸⁾。

だが、『他人の顔』ではこうした流れとは全く逆に、赤の他人になりすます「ぼく」の仮面があれば、国家に解体の危機をもたらす可能性さえあることを提示する。顔の自己疎外性を克服することを追求した結果、「ぼく」の仮面は国家の危機さえ呼び起こしかねないものとなってしまふのだ。それは現代における危険な美容整形の先取りに近い。例えば、国際化するテロ活動や移民問題に対して、先進国では指紋や虹彩、はたまた顔の骨格までもスキャンする生体認証システムを導入することで、監視の目を強めている⁽³⁹⁾。だが、近い将来、美容整形が骨格まで加工することが可能になれば、犯罪者やテロリストを捕まえることはますます難しくなるだろう。その点で『他人の顔』は、加工される顔が共同体の脅威となる様子を、当時の最先端の技術を取り入れて描くことで、グローバル化の進む現代でも重要な問題を提示している⁽⁴⁰⁾。『他人の顔』で描かれる自己の疎外と加工された顔の問題は、現代社会が直面しているものでもあるのだ。

5、素顔か仮面か——『他人の顔』で描かれるアポリア——

前章で見てきたように、「ぼく」の仮面は赤の他人になりすますことで、法律や監視の目をかいくぐることを可能にする。それは〈素顔〉という制度に支えられた国家を無効化する可能性を秘めた不穏なものである。同時に、そのような仮面の効果は所有者に全能性をもたらす。「仮面のアリアバイは完璧であり、約束してくれている自由は、無尽蔵」だと言うように、「ぼく」はその全能性の虜になる。やがて「ぼく」は顔の自己疎外性を克服することよりも、「生存の目的とは、おそらく自由を消費することなのだ」として、仮面のもたらす自由を謳歌することが本来の目的のように思い込んでしまう。〈素顔〉という制度によって人々を管理する国

家のありようを批判したり、〈想像する―想像される〉顔の擬似的連帯の排他性を指摘したりするのではなく、むしろその内部において、仮面による完璧なアリバイを手にしたまま、勝手気ままに振る舞う快感を享受する方向へと傾いていくのだ。それは、妻を誘惑することで彼女に〈素顔〉という観念がいかに頼りないものかを教えるという当初の目的を超えて、世間の女性に対する痴漢的な欲望を目覚めさせる過程とも照応している。

だが一方で、『他人の顔』ではそのような仮面を扱うことの難しさや限界も提示される。それは具体的には仮面と素顔の「ぼく」との人格のズレとして現れる。例えば、「ぼく」は偶然立ち寄った玩具店で空気拳銃を購入した際に「これでは話が違う……ぼくはただ、自分の恢復に手を貸してくれと頼んだだけなのだ……好き勝手をしてくれと頼んだことなど、一度だってありはしない……そんな、ピストルなんか持って、一体ぼくはなにを仕出かそうというのだ……」と、仮面の発揮する暴力性に怖気づく。両者の人格のズレは、妻があつさり仮面の誘いに乗ったことで決定的なものとなる。妻への不信感と仮面への嫉妬心に苦しむ「ぼく」は「自分と仮面とが、ここまで分裂してしまったことに、我慢のならない荒廃したもの」を感じるのだ。

結局、「ぼく」は「三者合意のうえで、この三角関係を清算する」ことを選ぶ。そこで選ばれた方法が、妻に宛てて一切を告白した手記を書き残すことであった。《灰色のノート》の結末では、仮面と素顔の「ぼく」の人格のズレについて、「顔が在ったものではなく、作られたものだ」とすると、ぼくも仮面をつくったつもりで、実は仮面でもなんでもなく、あれこそがぼくの素顔で、素顔だと思っていたものが、実は仮面だったというようなことも……と、仮面の破壊的な性質が元々「ぼく」の持っていたものであることが示唆される。だが、仮面の人格を本物の〈素顔〉、「素顔だと思っていた」人格を偽りの〈仮面〉とみなしている点で、「ぼく」は〈素顔〉／〈仮面〉≡真／偽という二項対立の枠に再び陥っている。結局、〈素顔〉という観念から抜け出すこと

を指しながら、その觀念に最も縛られていたのは「ぼく」自身に他ならないことがここで分かってくるのだ。それは、「ぼく」に「疚しさの影さえ見せず」仮面との浮気を続ける妻に対して、「誘惑者を逆に誘惑し、痴漢を自虐にまみれさせ、けつして犯されることのないおまえは、いったい何者なのだ？」と、その外面から内面が伺えないことに恐怖感を抱いている姿からも明らかである。『他人の顔』の本文が「ぼく」の書き記す三冊のノートによってほぼ構成されている以上、そこで語られている世界観は〈素顔〉という觀念や内面主義から必ずしも解き放たれているわけではないが、そこには批判的な視点も組み込まれている。それは、『灰色のノート』に挿入された〈妻の手紙〉によって、「ぼく」が激しく批判される姿が描かれていることから明らかである。『灰色のノート』の最後に、「ぼく」は妻に宛てて「この先、ぼくらが何処へ行くのかは、知らないが、まだ話し合ってみる余地くらいは残されているように思うのだ」と書き記すが、手紙の中で妻は「あなたに必要なのは、私ではなくて、きつと鏡なのです。どんな他人も、あなたにとつては、いずれ自分を映す鏡にすぎないのですから」と、彼との対話を真つ向から拒否する。繰り返すように、自己の顔が見えない私達は、他者の表情を鏡として自己の顔の想像する他ない。だが、そうした共謀関係を通してしか自己は自己自身に近づけないのだとすれば、想像の元となる他者の反応自体が、実は自己の想像の産物にすぎないのではないかという疑いが持ち上がる。つまり、私達が見ているのは実は他者ではなく、そこに映された自己の表情なのかもしれないということだ。ここでは他者に対するどんな呼びかけも自己への独白となってしまうのである。それは、一連の「仮面劇」に対する妻の理解を求めてノートを書き始めた筈の「ぼく」が、「いつかぼくは、書くこと自体に生きがいを感じはじめ、何時まででもこうして、書きつづけていたいと思つたほどである」として、書くという行為を自己目的化する過程と照応している。「ぼく」は妻に対して語りかけているつもりでも、そ

ここにいるのは現実の妻ではなく、「ぼく」の告白を黙って受け入れてくれる想像上の妻なのである。「あなたに必要なのは、私ではなくて、きつと鏡なのです」という妻の言葉は、そのような〈想像する―想像される〉関係を介した「ぼく」の独善性を批判するものだった。

以上のように、『他人の顔』は「ぼく」が〈素顔〉という観念から脱し切れていないこと、更に〈妻の手紙〉を通して「ぼく」の中の独善性をあぶりだすことで、妻に正体を見破られた上に去られるという「ぼく」の虚しい末路を当然の結果として描いている。「そんな、鏡の砂漠なんか、私は二度と引返したいとは思いません」という絶縁状に等しい妻の言葉は、「ぼく」の仮面の全能性を消し去る。ノートの中では「人間の存在を賭けた、脱獄の試み」として描かれてきた仮面は、〈妻の手紙〉がその合間に挿入されることで、結局仮面を被っても「良いことも、悪いことも、何一つすることはできなかつた」一人の男の「たわいもない一種的茶番劇」の道具として卑小化されてしまう。このように、『他人の顔』の構造自体が、仮面の全能性を提示しながらも、それを相対化するものとなっているのだ^(註)。

では、妻の批判の眼目はどこにあるのか。「顔は人間同士の通路だなどと言いながら、税関の役人みたいに、自分の扉のこじりか考えない、巻貝のようなあなた」と非難しているように、妻が何より許せなかつたのは、「ぼく」が顔の自己疎外性・内面性・共同性を克服するという自らの目的のただけに、仮面を被って妻を騙そうとしたことにある。妻の主張によれば、仮面とは自分のために被るものではなく「愛する者のために、仮面をかぶる努力」をするものだと言う。〈素顔〉が読まれるべき内面を隠している点で〈仮面〉に他ならないことは既に述べたが、妻の言葉には「ぼく」の仮面とは異なる、もう一つの〈素顔〉という〈仮面〉を、それが〈仮面〉にすぎないことを自覚しつつも、社会を維持するためには被り続けなければならないという考え方があ

だが、結局それは、外面を内面に従属させ、(想像する—想像される)顔の共同性へ、妻が批判した独善的な関係性へと回帰することでもある。その点において、「妻と男の論理の弁証が、言わば「合わせ鏡」にすぎない」ことを指摘した佐藤泰正の見解は正しい⁽⁴²⁾。ただし、「おまえは、仮面の必要を認めても、決して禁止を犯したりしない、家畜化された仮面についてだけだったのだ」として、「家畜化された仮面」≡「素顔」という(仮面)の必要性しか認めようとしないうちに「ぼく」が疑問を呈するように、妻の論理が必ずしも正しいものではないことは『他人の顔』においても示されている。

そのような妻の考え方に抵抗するために、「ぼく」を再び仮面を手にする。「だが、今度からは、気をつけるがいい。今度、お前を襲うのは、野獣のような仮面なのである」と「ぼく」が述べているように、ここで「ぼく」の仮面は「野獣のような仮面」へと変貌を遂げる。ここでの変貌が意味しているのは、(素顔)という觀念に頼ることを今度こそ完全に放棄し、(想像する—想像される)顔の共同体に背を向けて生きるということである。これまでのように空想の中だけで仮面の全能性を楽しむのではなく、実際に「野獣のような仮面」を使って「掬破り」という「行為によって現状を打開する」こと、それこそが「素顔に打ち克つ」道だと「ぼく」は考えるのだ。

このような「ぼく」の行動に対して、従来の『他人の顔』研究では否定的な見方が多い。例を挙げると、福島章は「自分の中の「叫び」をみつめることも、「他者存在の心」に想像力を働かせることも諦め」た「ぼく」の姿は、他者に過剰な期待を抱く「甘え」でしかないと批判し⁽⁴³⁾、佐藤泰正は「主人公が再び取り上げる仮面は、もはや「仮面」ならぬ覆面にすぎず、それが「仮面」の思想ならぬ、「仮面」の機能の、無残な末路である」と述べている⁽⁴⁴⁾。だが、「ぼく」が再び被ることになる仮面を、「甘え」や「無残な末路」といったよ

うに、矮小なものとしてのみ語ることは、「ぼく」の仮面の持つ危険性を無意識に隠蔽することでもある。これまで論じてきたように、「ぼく」の仮面は〈素顔〉という観念の範疇に収まっているように見せかけながら、実際には「仮面の陰」から他者を一方的に覗き見ること、また私達を取り巻いている様々な規範やしがらみを無視して行動することができるという点において、〈想像する―想像される〉顔の共同体の中で生きる他者よりも優位に立つことができるものであった。それは同時に、他者の眼差しを頼りにすることなく、皮膚から顔の造作、細部の表情に至るまで、一から自分自身の手で創造することで、自分自身の顔が見えないという顔の持つ根本的な自己疎外性を克服する試みに他ならない。ただし、そのような仮面は所有者の「ぼく」にある種の暴力性を纏った全能感をもたらすと共に、〈素顔〉という制度を無効化することで、国家に解体の危機を引き起こしかねないものでもあることを考察してきた。そうした仮面の持つ複雑な多面性を描き出すことが『他人の顔』の主眼なのであって、「だが、この先は、もう決して書かれたりすることはないだろう。書くという行為はたぶん、何事も起らなかった場合だけに必要なことなのである」という下りは、「ぼく」の仮面の破壊性を示唆した上で、なお結末について語ることを避けることで、読者の心にある問いかけを与えている。それはつまり、「ぼく」の仮面が現実のものとなった時、私達は一体どうすべきかということである。

最後に、自分の顔が自分では見えないこと、それは六〇年代に起きた疎外論のブームがとうに過ぎ去った現代でも、変わることはない自己の問題の一つである。〈素顔〉という観念と〈想像する―想像される〉顔の共同性によって顔の自己疎外性を覆い隠すことで、顔を媒介とする擬似的連帯をこれからも他者と築いていくべきなのか。それとも自己の疎外を克服するためには、国家や家庭といった共同体に背を向けてでも、「ぼく」のように仮面を被って生きるべきなのか。前者をとれば独善性の壁につきあたり、後者をとれば自らの自由の

ために他者を犠牲にする、まさしく「怪物」的存在になってしまふ。それは、本物の〈素顔〉と偽りの〈仮面〉という二項対立には決して回収しきれない解決困難な問いである⁽⁴⁵⁾。『他人の顔』はそのようなアポリアを私達に突きつけているという点において、現代においてなお色褪せない作品であると言えるだろう。

付記

『他人の顔』（単行本版）の引用は『安部公房全集18』（新潮社、一九九九年三月）によった。

注

- (1) 奥野健男「現代文学の基軸——虚数の有効性」、『文学界』、一九六五年三月
- (2) 福島章「他人の顔についての散文的メモ」、『ユリイカ』、一九七六年三月
- (3) 北川耕「『壁』の中の実存と転向（下）——安部公房の世界」、『民主文学』、一九七二年二月
- (4) 高山鉄男「安部公房における仮面の思想」、『国文学』、一九七二年九月
- (5) ウィリアム・カリー、安西徹雄訳「疎外の構図」、『新潮社』、一九七五年六月
- (6) (5) に同じ。
- (7) マルクス、城塚登・田中吉六共訳『経済学・哲学草稿』（岩波書店、一九六四年三月）
- (8) フリッツ・バツペンハイム、栗田賢三訳『近代人の疎外』（岩波書店、一九六〇年七月）
- (9) 出版年鑑編集部『出版年鑑』（出版ニュース社）の一九六一年～一九七三年版までを参考にした。
- (10) 北川隆吉編『現代社会学講座Ⅵ 疎外の社会学』（有斐閣、一九六三年十二月）
- (11) (7) に同じ。
- (12) 小熊英二『「民主」と「愛国」』（新曜社、二〇〇二年十月）
- (13) 柄谷行人編『近代日本の批評Ⅱ 昭和篇下』（講談社、一九九七年十一月）

- (14) 磯田光一「無国籍者の視点——安部公房論」(『文学界』、一九六六年五月)
- (15) 高山鉄男「安部公房論——他者からの逃亡」(『自由』、一九七二年二月)
- (16) 安部はエッセイ「隣人を超えるもの」(『現代芸術と伝統』、一九六六年十二月)で、血縁や地縁による共同体の内部の存在を「隣人」、その外部の存在を「他人」あるいは「他者」と呼び、高度経済成長期の急速な都市化によって、前近代的な共同体の連帯が崩れ、他人同士が集まる社会が到来したことで、人々の心には孤独感や不信感が生じていると述べている。だが、そこで重要なのは国家や家庭といった擬似共同体に回帰することではなく、現状を孤独と感ずることを避けずに、他者との直接的なコミュニケーションを回復することだと言う。「他人の顔」でも「なにぶん、隣人と、敵とが、もはや昔のように、誰の目にも容易に見分けがつくはつきりとした境界線で区別されなくなってしまったのが現代」なのだから、「他人は敵と、いさぎよくあきらめの境地に達し」一孤独の免疫体をつくってしまった方が、むしろ安全」として、前述のエッセイと同じ論理が「ぼく」の口を通して語られる。
- (17) 波瀾剛「安部公房の『他人の顔』論——文章構成の形態とテーマをめぐって」(『文学研究論叢』、一九九六年三月)
- (18) 友田義行「安部公房『他人の顔』における身体加工——共同体・皮膚の言語・他者」(『日本近代文学』、二〇〇九年五月)
- (19) 藤井貴志(「独身者の機械」と「異形の身体」表象——『他人の顔』『片腕』『人形塚』の同時代性)(『日本近代文学』、二〇一四年十一月)
- (20) 中野和典「安部公房『他人の顔』論——仮面と行為」(『コンパラティオ』、二〇〇二年五月)
- (21) A・リハチョフ「他人の顔」小論——『砂の女』との共通性をめぐり(『湘南文学』、二〇〇〇年三月)
- (22) 玉置仁美「他人の顔」における仮面の二面性——直接的なコミュニケーションをめぐる(『湘南文学』、二〇〇七年三月)
- (23) 武石保志「他人の顔」試論——書くことと読むことを通しての「他人」(『日本文学論叢』、一九八二年三月)
- (24) 田中裕之「他人の顔」論——その構想と形象(『梅花女子大学文学部紀要』、一九九五年十二月)
- (25) ラカンの鏡像段階理論によれば、生後六ヶ月から十八ヶ月の幼児は、まだ運動調節能力もないような無力な状態だが、鏡の中の自分の像を見るという経験をを通して、自分の身体の一性を想像的に先取りして我が物とす

る。幼児は鏡に映る統一された自己像と同一化を果たすことで、将来自我（行動や思考の主体となるもの）となるものの雛形ないし輪郭を形成するのだ。ところが、主体は鏡像化を通じて、自己を外部の他なるものの中にしか還元できないという他者への疎外を経験することになる。以上は福島泰平『ラカン 鏡像段階』（講談社、二〇〇五年四月）を参考にした。

(26) 鷺田清一『顔の現象学』講談社、一九九八年十一月

(27) 「ぼく」は自己の顔を「怪物の顔」ないし「覆面の異形」と自虐的に表現し、仮面作りによってそこから抜け出すことを望んでいるが、言葉によって自己の顔を定義することで、自己の顔の様態をなんとか把握しようとしているとも考えられる。

(28) 川添裕子『美容整形と〈普通のわたし〉』（青弓社、二〇一三年五月）

(29) (26) に同じ。

(30) 鷺田清一『顔の現象学』（26）に同じ）によれば、近代以降の資本制の展開と共同体間の交通の拡大は、それ以前の伝統的共同体の紐帯を断ち切り、新たな共同性の位相で規定される存在意味（社会的Ⅱ公共的な役割）を人々に与えた。一方で、近代以降の社会を共同的な親密さの喪失ないしは衰退としてとらえる向きが、その失われた共同性という幻想を補完するものとして、〈わたし〉の内部という私密的な閉鎖空間と、その内部を繋ぐことによる人間同士の新たな交通の形式とを生み出す。このような一般性と個別性という二重性によって自己が認識されると共に、同一の顔における作為と自然の二重性、すなわち〈仮面〉と〈素顔〉の概念もまた生まれた。

(31) これとは別に文化的落差を持つ顔の解釈のコードも存在する。例えば『しぐさの比較文化』（リージャー・プロズナハン、岡田妙・斎藤紀代子共訳、大修館書店、一九八八年三月）では、日本人は英国人に比べて感情を表情に出すことを意識的に抑制する国民性を伝統的に保有しているが、格式ばった状況での喜びの表情（いわゆる愛想笑い）は英国人の標準を上回ると書かれている。一つの文化共同体のメンバーが同一の表情のタイプを見せるのは、彼らが顔の解釈のコードを共有しているためである。『他人の顔』でも「朝鮮人の田舎者みたいな顔」をしたウエイトレスの娘が二、三人の朝鮮人にかかわれて「顔をほころばせる」場面が存在する。彼らにとつて顔のつくりをからかうということは、文化的な顔の解釈のコードを共有する者への「好意を含んだ肯定的な呼びかけ」なのである。

- (32) 谷本菜穂『美容整形と化粧の社会学』（新曜社、二〇〇八年七月）
- (33) 塩谷信行『美容外科の真実』（講談社、二〇〇〇年二月）
- (34) リチャード・ニリー、二宮馨訳『仮面の情事——プラスチック・ナイトメア』（新潮文庫・一九九一年九月）
- (35) 小野俊太郎『ビゲマリオン・コンプレックス——プリーティ・ウーマンの系譜』（ありな書房、一九九七年五月）
- (36) (20) に同じ。
- (37) 小泉信三『日本と日本人』（小泉信三全集、文芸春秋社、一九六七年〜一九六八年）
- (38) 三島由紀夫『文化防衛論』（『中央公論』、一九六八年七月）
- (39) デイヴィッド・ライアン、河村一郎訳『監視社会』（青土社、二〇〇二年十一月）
- (40) 渥美和彦の『人工臓器』（岩波新書、一九七三年八月）によれば、『他人の顔』が書かれた一九六〇年代は、ナイロンやシリコンといった高分子材料の発展や、プラスチックの生産量の増加により、皮膚を含めた人工臓器の開発が飛躍的に進んだ時代である。「ぼく」が『黒いノート』を丸々一冊使って記述するのも、動く皮膚を再現するための表皮、真皮、脂肪層の材料づくりといった技術的な処理の問題である。
- (41) 初出の群像版では〈妻の手紙〉が「もう一度だけ、あなたの返事をお待ちすることにいたします」という言葉で締められているのに対して、単行本版では「そんな、鏡の砂漠なんかには、私は二度と引返したいとは思いません」と妻が二度と「ぼく」の元に帰ってくるつもりがないことがはっきりと語られている。これによって、単行本版では「ぼく」の仮面の全能性が〈妻の手紙〉によって相对化される構造がより明確に提示されている。また、単行本版の『灰色のノート』と『灰色のノート』を逆さに使って、その余白に、最後のページに書き加えられた、自分だけのための記録』は群像版には存在しない。つまり、単行本版では〈妻の手紙〉を読んだ「ぼく」の応答である『灰色のノート』を逆さに使って『』を新たに書き加えることで、妻の言葉が必ずしも正しいものではないということが示されていると共に、「ぼく」が〈妻の手紙〉を読んだとった行動、ひいては仮面の機能の是非について読者が考える余地が残されていると言えるだろう。
- (42) 佐藤泰正『他人の顔』（『解釈と鑑賞』、一九七一年一月）
- (43) (2) に同じ
- (44) (42) に同じ

(45)

安部は後年のインタビュで、大海に浮かぶ一人乗りのいかだに二人の人間が取り付いた時、どちらを生かすべきか、というような「解答不可能なジレンマ」を抱える状況が日常化したのが現代であるが、「作家としては、解答がない事を承知で問い続けるといふことだけが唯一の解答ではないか」と自らの姿勢について語っている。「自作を語る——『方舟さくら丸』」新潮社テレホンサービス、一九八四年十一月、後『安部公房全集28』（新潮社、二〇〇〇年十月）に所収）

A Study of Kobo Abe's "The Face of Another":
Self-alienation and Processed Face

KATANO, Tomoko

"The Face of Another" is a story written by Kobo Abe in 1964. A man has lost his face and, with it, connection to other people. So he wants to create a mask that replaces his lost face—the face of another. The purpose of this study is to discuss what the face is and what role his mask plays. In the first place, the face has three properties. The first property is self-alienation. A number of studies on "The Face of Another" has proposed that his lost face is a metaphor of the problem that capitalist society causes—the loss of identity. In capitalist society, we human beings have lost "real" faces (a metaphor of identity). It is a problem of self-alienation. However, we cannot see our own faces without mirrors and facial expressions of other person. It is the most important problem of self-alienation. The second property is connection to spirit. In terms of the concept of "real" face, our faces are connected with our spirits. But the distinction between outside and inside (face, body and spirit) has made in contemporary times. The concept of "real" face is also the same. The third property is mutual. We cannot see our own faces, so we make our own images through other eyes. That is to say, the face is not a personal and natural phenomenon but a social and artificial phenomenon. It is a very important tool to communicate. For example, face-to-face communication is more effective and trustworthy than other types of communication such as telephone or email. Some certificates require a photograph of face. However, his mask is the face of another. Such mask is more than a disguise because it is a new self that is capable of anything. His mask has the potential to make face-to-face communication useless—even destroy all kinds of communities. In future, because of development of cosmetic surgery, his mask will be realized. However,

his wife penetrates his mask and criticizes him. She claims that we should communicate each other by means of our faces, on the other hand, he claims that we should wear masks such as his mask to overcome self-alienation. Even nowadays, it is aporia which opinion is correct.

(日本語日本文学専攻 博士後期課程二年)